

美しく生きる

上伊那地区
賛助会

上伊那地区賛助会会報 季刊
第118号 2015年1月21日発行
長野県長寿社会開発センター
伊那支部 上伊那地区賛助会
TEL 0265(76)6863

恒例の「賛助会の集い」を開催

10月28日生涯学習センター6階にて

上伊那地区賛助会は、昨年の10月28日に伊那市生涯学習センター（いなっせ）の6階大ホールにおいて秋の恒例の「賛助会の集い」を開催した。

6階大ホールのホワイエでは作品の展示を行い、式典や賛助会会員の発表はステージ客席のあるホールを利用して行われた。

展示品は前日の午後から出展者や役員も一緒になってちぎり絵、絵手紙、書、俳句、短歌、日本画、洋画、個人作品などがきれいに配置され展示されていた。（写真右）

参加者は賛助会会員だけではなく、シニア大の2年生も参加して作品鑑賞、式典、グループ活動発表など、午前、午後を通じて盛大に行われた。この集いには、一般の地域の方も自由に参加できるようになっていた。

午後からは「ヴァイオリンによる秋の爽やかコンサート」と題して郷土出身のヴァイオリニスト北原よし子氏と、ピアニストの奥村夏樹氏による演奏会が行われ観衆は爽やかな演奏に酔いしれていた。

これらについての詳細は、次頁以降において説明する。



NHK大河ドラマ
あらすじ

燃ゆ

今年の大河ドラマは明治維新の先駆者として名高い吉田松陰の妹の文（ふみ）の物語である。文は吉田松陰の生家、杉家の7人兄弟の4女として生まれた。兄松陰は、叔父である吉田家の養子となつた後は6歳にして吉田家の家督を継いだ。杉家のすぐ傍には松陰の主宰する松下村塾があり、高杉晋作、久坂玄瑞、伊藤博文らの多くの若者たちが松陰のもとで学んでいた。文は兄を尊敬して集まる若者達に可愛がられ、交流を深めてゆく。そして文は、松下村塾の双璧であり、松陰から「防長年少第一流」と絶賛された門下生の久坂玄瑞と結婚する。しかし、尊王攘夷に奔走する玄瑞は、元治元年（1864）禁門の変で自決。夫を失った文は毛利家に仕え、毛利の後継である元昭（もとあきら）の守役に抜擢される。そして幕末の動乱を乗り越え、久坂家を残そうと奮闘する。

その後、美和子と名を変え、亡き姉・寿の夫であった群馬県令・揖取彦（かとりもとひこ）の妻となる。（N H K資料より抜粋）

グループ活動発表

午前中の主行事は、にこにこ会、朗大28期会、さとみ俳句会、ふれあいマレットの4つのグループによる活動発表であった。発表は各グループ共スクリーンに画像を映して説明を加えて発表が行われた。

にこにこ会

にこにこ会の活動方針で掲げている「健康づくりと趣味を活かして、地域活動で社会貢献」と題し、平成26年度のボランティア活動として、宅養老所や特別養護老人ホーム等を訪問し、紙芝居や手足の体操を行ったり、歌などで利用者と交流を深めた活動をした。施設周囲の美化活動として、庭の手入れや花壇造りに取り組んだ。会員の健康づくりを兼ねて、各地区の公園を散策しながら、空き缶やゴミ拾いを実施した等、の事例を加えた発表であった。

今後の活動について

- ① 活動計画の周知と確実性を高める
- ② 会員全員に連絡が確実に取れる様にする。
- ③ 会員以外にも声かけして仲間の輪を広げて行く。
- ④ 趣味を活かしたプログラムを取り入れる。

特に、会員以外にも仲間を広めて、活動を行って行きたいと参加を呼びかけた。

朗大28期会

続いて「朗大28期会」の発表が行われた。この会は「友情の絆の輪を広げ、健康づくり生涯学習を続けて、心豊かな高齢者として地域に貢献する」ことを目的として設立されたものである。その具体的な活動項目は左表の通りである。現在の会員数は、

- ・生きがい健康づくり
- ・福祉ボランティア活動
- ・若年層を対象とした交流、支援
- ・町づくり、地域文化の伝承
- ・自然保護、環境美化運動

非賛助会員も含めて44名であり、設立から現在に至る活動の主なものを映像によって説明があった。

主な映像は、合唱会と講演、ハイキング会、講話を聞く会、新聞社見学、小学生への文化の伝承、公の地域の環境整備、清掃等で約20枚について説明があった。最後に「日本人は、東日本大震災に対しても冷静で忍耐力のある優れた民族である」と世界

各国から絶賛された言葉を引き合いに出して、「私達もこれに応えられるよう活動を行ってゆこう」と呼びかけた。

さとみ俳句会

「さとみ俳句会」の発表は上伊那地区賛助会の副会長である橋爪氏がこの会の代表なので同氏から説明があった。設立は平成20年であり、現在会員数は13名である。

設立の目的は、生きがいと会員相互の親睦、俳句技能の向上である。

指導をされている先生は、シニア大、賛助会を通じて俳句に係る指導を受け持つて頂いている羽場桂子先生である。

学習は月1回行い、予め作品を提出しておき、教室において添削指導をお願いしている。また年数回、吟行に出かけて現地で作った作品を指導して頂くなど、親睦もうまく活動している。

最後に俳句の魅力を次のように語った。

- ・感情が豊かになり、日本語を深く理解するようになる。
- ・五七五の表現を行う文学の学習である。
- ・作ることが詠む（読む）ことである。そしてまた喜びである。

「皆さんも仲間になりませんか」 と声をかけて終了となった

ふれあいマレット

平成2年4月、県長寿社会開発センター上伊那支部設立総会の席で、時の老大卒業生14名で産声をあげた「ふれあいマレットグループ」も歴代の役員や会員の努力で、現在33名で活動している。

発足時の目的である「お互いの健康管理と和をモットーに心のふれあいを大事にする」事と、活動方針として年2回の研修旅行の実施は今も忠実に守り続けている。グループの運営は総会で決められた年間計画に基づき、郡下各地のマレット場で月2回の定例会を行い、その都度昼食会をし交流を計っている。活動の充実化としてマレット通信を発行し各種情報の共有化を計っている。更には毎年開催される「信州ねんりんピック」には積極的に参加し好成績も収めている。例会の出席率は70%で、研修旅行の参加率も70%を超えており、グループ員の平均年齢もついに80歳を超え高齢化は進んでいる。今後は無理のない計画と実行、新規会員獲得に努力して行きたいとの事であった。

ヴァイオリンによる秋の爽やかコンサート

午後は、記念行事として郷土出身のヴァイオリニストの北原よし子さんと、ピアニストの奥村夏樹さんのお二人による、ヴァイオリンとピアノによるアンサンブル・コンサートが行われた。(写真下)

北原さんは、東京芸術大学を卒業された後、同校の大学院ならびに研究科を修了され、ミシガン大学にも留学された方である。また奥村さんは東京音楽大学卒業後、同校の大学院ピアノソロ科を修了された、錚々たるお二人である。

演奏テーマも、「ヴァイオリンによる秋の爽やかコンサート」～移りゆく季節の光と風～と名付けられたもので、クラシック曲から懐かしい唱歌や最近の曲など音楽愛好家にとっても楽しい満足できる選曲と演奏を行ってもらった。

主な曲は、マネス作曲の「タイスの瞑想曲」、クライスラー作曲の「美しきロスマリン」、ベートーベン作曲の「ピアノのためのソナタ（春）」などであり、その他に私達も馴染みの深い「花は咲く」「ふるさと」などであった。

ヴァイオリンとピアノ奏者の奏でるハーモニーが華やかにステージを彩った。

会場から絶大な拍手喝采で観衆も満足の爽やかなコンサートで酔いしれていた。



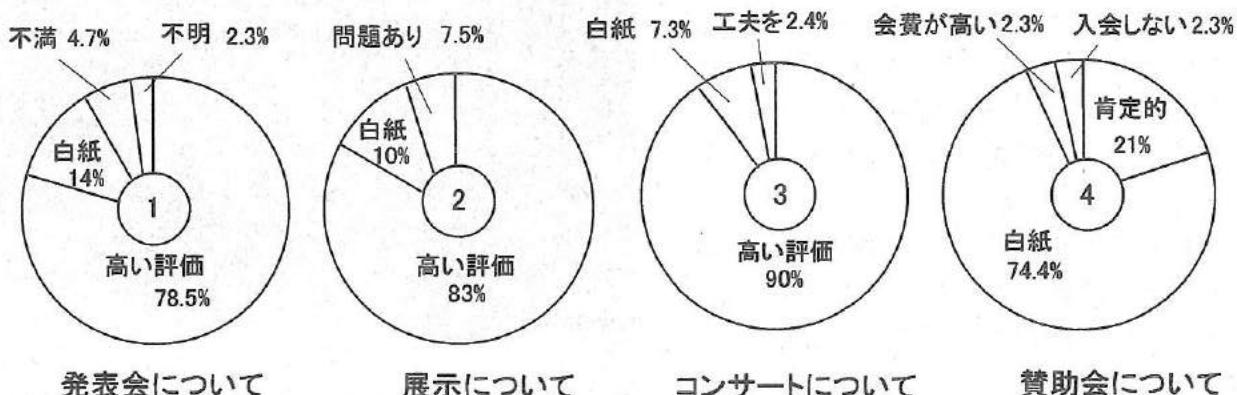
「賛助会の集い」に関するシニア大生のアンケート結果

昨年10月28日に伊那市生涯学習センターにおいて行われた「賛助会の集い」にシニア大の2年生にも参加してもらった。 参加されたシニア大生に、当日の行事等に関するアンケートを提出してもらったので、その内容を下に纏めてみた。

① 発表会について		② 展示について		③ コンサートについて		④ 賛助会について	
卒業後の活動に感心した	8	良くできている	30	良かった	30	入会したい	2
良く頑張っている	18	自分の製作に参考になった	2	またお願ひしたい	2	新グループを作りたい	1
良い発表であった	6	きれいに飾つてあった	1	やすらぎを得た	2	グループが多い	1
入会したい	1	展示の仕方に問題あり	3	身近に素晴らしい人がいる	1	長続きしていることは良い	3
白紙	6	白紙	4	解説が入って良かった	2	興味はある	2
発表の仕方に不満	2			白紙	3	会費が高い	1
不明	1			司会に工夫を	1	入会したくない	1
						白紙	32

注：1人が2つの項目に該当する回答もあるので、それぞれの合計は一致しない。

上の結果を円グラフにしてみると、下の通りとなった。



2014 信州
ねんりんピック

パネルディスカッションに参加して

いきいき 31 代表 松崎 哲

9月に小諸市において行われた「信州ねんりんピック」において、ねんりんピックでは初めての「パネルディスカッション」が行われ、私もパネリストとして参加させて頂いた。(写真右)

信州ねんりんピックは、長野県内各地を年毎に輪番で行なわれており、今年は「高齢者の生きがい・健康づくりや社会参加の関心を高め、健康と長寿に対する理解を深め、明るく活力のある長寿社会を目指す」ことを基本に、「誰でもその人らしく居場所と出番がある信州を目指して」～いまシニア世代の力が求められている～をテーマにパネルディスカッションが行われた。

コーディネーターは、長寿社会開発センターの内山理事長が行い、ゲストパネリストに阿部県知事をお招きし、他のパネリストは松本地区賛助会長の小野氏、長寿社会開発センターの主任シニア活動コーディネーターの戸田氏と私の5名による討論会形式で行われた。その内容について下に纏めてみた。

1、ディスカションの内容

冒頭にパネリストの紹介があり、それぞれのパネリストに現在の活動を始めたきっかけや活動状況、グループ活動の状況、活動を行うまでの課題、今後の抱負などの報告を行った後、コーディネーターの内山氏が聴衆者の席まで降りて、参加者に質問や意見を聞くというインタビューが始まり、軽妙な進行に釣られながら会場からの意見や質問に対しての考えをディスカッションするという形で展開されていった。

これらを要約すると、

- ① 平均寿命が伸びた現在は、何歳から「高齢者」と呼んだらよいか？
- ② 貴方は何歳まで自分に合ったスタイルで社会と係わってゆきたいか？
- ③ 高齢者（シニア世代）の社会参加を進めるには？
 - ・シニアの経験、知識、特技、やる気をこれから地域づくりにどう活かしたらよいか？
 - ・シニア世代がもっと社会参加し易い環境を作るために何が必要か？
 - ・長野県を世界一の健康長寿県にするためにはどうしたらよいか？

などであった。

松崎
哲
氏

ステージ上のパネルディスカッション

そして最後にメインテーマの「人生二毛作・生涯現役」が取上げられた。

④人生二毛作・生涯現役

会場の入り口において、来場者の意見をメモに書いて貼りつけた「人生二毛作・生涯現役」実現に対する意見メモのボードが会場ステージ上に移動し、内山コーディネーターがその中のいくつかを読み上げながら、その作成者から抱負や夢についてコメントを貰った。

その後、それぞれのパネリスト達も大きな用紙に抱負を作成して発表を行った。

私は、「認知症が進行して支えて頂くようになるまでは、お互いの心が休まる『支え愛』で、感謝の恩返し！」と発表した。

また、阿部知事からのコメントは、「10人10色ではなく、1人10色で複合的に意欲を持って出番と自分らしい生きがいを歩んでほしい」と締め括られた。

2、パネリストとして

今回、私は信州が注目される長寿県になって、社会を取り巻く環境が大きく変化し、高齢者を高齢者が支える時代の到来において、各地で取り組んでいるボランティア活動の実態を、直接聞くことができたことは何よりの収穫であった。

特に、シニア・シルバー世代が地域の担い手として積極的に活動されている話に感動し、頭が下がり涙腺が緩むのを抑え切れなかった。

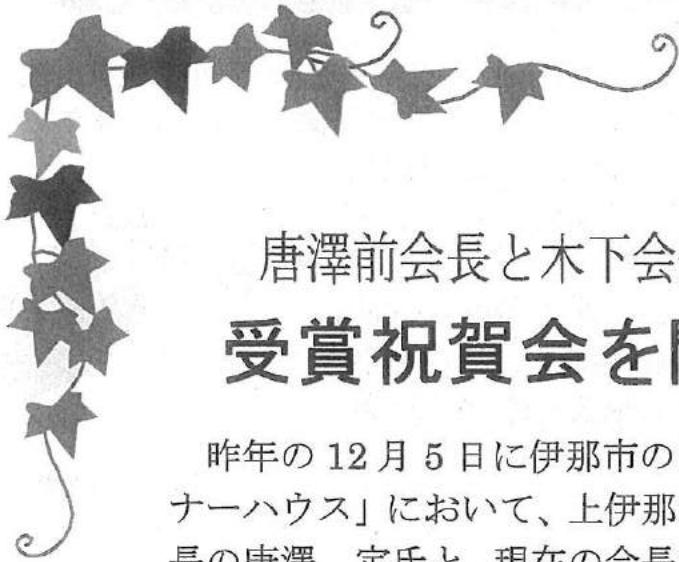
また、知事の「1人10色で複合的に・・・」と言われたことは、こだわりを持たないで臨機応変に意欲をも持って対応することであると理解している。

私は「まだまだ若輩者、衰えてなど居られない！」という意欲に再点火して、生まれ育った地域に感謝の恩返しをしたいと考えている。

結びに、貴重な経験を与えて頂いた長野県長寿社会開発センターのご尽力と「明るく豊かな長寿社会の実現」への取り組みに感謝し、今後とも精いっぱいの応援を続けてゆきたい。



終了後、会館前にて上伊那地区賛助会の出席者が阿部知事と内山理事長を囲んで記念撮影(写真左)を行い、この日は終了となった。



唐澤前会長と木下会長の 受賞祝賀会を開催

昨年の12月5日に伊那市の「信州INAセミナーハウス」において、上伊那地区賛助会前会長の唐澤 定氏と、現在の会長である木下幸安氏のお二人の受賞祝賀会が開催された。

唐澤氏は、昨年小諸市で行われた「信州ねんりんピック」において、阿部県知事より社会福祉に大きな貢献を成されたということで、県内から8名の方が表彰された中の一人である。

また木下会長は、昨年の秋の叙勲において旭日雙光章を受賞された。

旭日雙光章は地方自治における功労が顕著であるという名誉な表彰である。叙勲は天皇のお言葉を頂くと共に、勲章が授与されるものであり、会長も皇居へ行かれて天皇陛下よりお言葉を賜ったそうである。

受賞祝賀会は、賛助会員やその他の方を含めて30人を超える方が出席され、余興もあって盛大な祝賀会であった。

唐澤 定 氏 社会福祉表彰
木下 幸安 氏 旭日双光章 受賞祝賀会

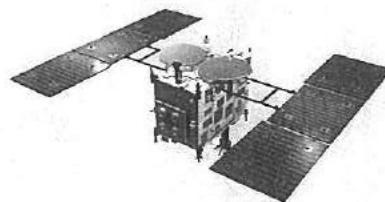


**新技術
特別記事**

小惑星探査機はやぶさ2の冒険

2014年12月5日に種子島の宇宙センターから打ち上げられた小惑星探査機「はやぶさ2」は、2010年に地球へ帰還した「はやぶさ」の後継機として、2020年に帰還するまでに沢山のミッションを携えて、目的とする太陽系惑星のひとつである「1999JU3」という惑星に向けて進行中である。

1号機は2003年に打ち上げられ、世界で初めて500m程度の小惑星「イトカワ」を詳細に観測し、その表面物質を持ち帰ることに成功した。その成果が高く評価され、「はやぶさ2」プロジェクトが計画されたとも言える。



はやぶさ2の外観

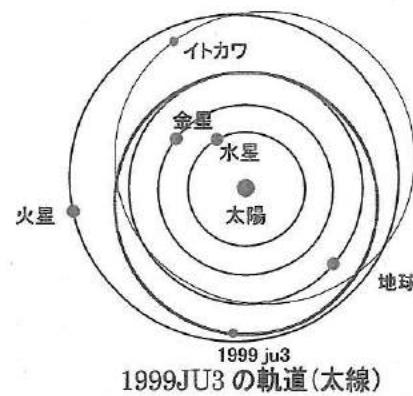
はやぶさ2のミッション（任務）

はやぶさ2のミッションは、はやぶさ1号機と同様に小惑星からのサンプルを持ち帰ることである。但し探査する小惑星は「イトカワ」とは異なり同じ太陽系の中にある1999ju3と名付けられている小惑星で、表面物質には有機物や水分が含まれていると考えられている天体である。そのような天体からのサンプル・リターン(持ち帰り)ができれば、約46億年前の太陽系が生まれた頃に存在していた水や有機物について知ることが出来、太陽系の誕生の謎の解明に迫るものである。

またこの他に深宇宙探査技術の確立がある。

先ず「やはぶさ」1号機で生じた不具合点を改良し、イオンエンジンや姿勢制御装置や耐久性を向上させている。

ミッション機器にはリモートセンシング（遠隔探査）観測用として、多帯域可視カメラ、レーザー高度計、赤外線分光計、中間赤外カメラなどを搭載している。



1999JU3 の軌道(太線)

注目すべき点

特に注目すべき点は衝突装置で、人工的にクレーター（噴火口のような地形）を作り出すことのできる機器を搭載している点である。実際に作ることが出来るクレーターは直径が数m程度の小さいものと考えられているが、衝突により露出した表面からサンプルを採取することで宇宙風化や熱などの影響をあまり受けてない新鮮な地下物質の調査ができるものと期待されている。

「はやぶさ2」の打上げは2014年であるから、小惑星に到着するのは2018年の半ばで、1年半ほど小惑星に滞在して2019年末頃に小惑星を出発、そして2020年末頃に6年間の仕事を終えて地球へ帰還する予定である。

出典：独立行政法人 宇宙航空研究開発機構（通称：JAXSA）の公開資料より抜粋

グループ活動だより

30カ寺を訪れました

寺院と仏像を訪ね
慈悲の心に学ぶ会

シニア大31期生が会を立ち上げて6年が経とうとしています。

晩秋の11月に中川村の延寿院を訪ね、住職の伊佐栄豊さんの法話を聞きましたが、1回目の駒ヶ根市中澤の藏沢寺を訪ねてからちょうど30寺院めに当たります。

法話の依頼の電話を入れたとき、外国から帰ったばかりの成田空港で受けさせていただきました。法話当日は、その後石川県能登へお出かけという誠にお忙しい伊佐住職でしたのに快く受けていただき、法話も資料を用意してくださったうえ1時間30分時間いっぱい使って事例を挙げてわかりやすく話されました。延寿院を退出し、伊佐住職お薦めの銀杏の並木を見に少し足を伸ばしました。帰り道、駒ヶ根の名物ソースかつ丼を食べながらおしゃべりをしましたが、これもこの会の楽しみの一つです。

30カ寺を巡りましたが、どの寺院も丁寧に対応してくださいました。先ず電話で依頼しましたが、見ず知らずの会の依頼を快く対応してくれました。次に挨拶に訪問しました。当日はどの寺院も茶菓の用意をして待っていてくれました。

心遣いに感謝です。

代表 長田 伊史



藏沢寺

不思議な六地蔵

ふるさとを学ぶ会

平成4年4月2日に設立した「ふるさとを学ぶ会」も、22年活動してきた。

当時からの参加者は、高齢化してきており「この辺で終止符も」と言う声も聞かれる、しかし、忘年会や総会などで「活動の継続を」と言うことで継続実施してきている。

ここ数年にわたる活動の概観をみると、23年度から25年度まで諏訪の観光についてガイドの案内によって研修をしてきた。小口太郎琵琶湖周航の歌と関わる諏訪湖の展望とその歌唱から始まって、諏訪大社の秋宮・春宮の建築・万治の石仏の民間信仰・旧御射山社跡の史跡・八島湿原の花々・諏訪大社本宮・柿蔭山房等々の地道な研修をしてきた。

26年は会員の希望で「野沢温泉の研修」という声が上がり、参加15名（うち友情会員の参加が2名）ということで、佐久間象山記念館、真田宝物館、班山文庫、不思議な六地蔵等々の研修を行う。夜は、宿の女将から温泉療養の話を聞いて歌や、踊りも楽しんだ。若い夫婦と祖父母による心温まる宿であり、参加者は、大変に満足。27年度は28年度、NHK 大河ドラマに予定される「真田丸」に関わる幸村の足跡をたどる上田地区の研修を計画している。

（下記の写真は、2011年栄村の大地震で一斉に向きを変えた六地蔵）

代表 中島 重治



不思議な六地蔵

節気

伝えて行きたい季節感

われわれの先祖は実に長い間自然の中で、自然を畏れつつ自然の恵みを受けて暮らしてきました。そんな生活の中で移りゆく季節の区切りとして、又、生活の区切りとして馴染んで来たのが、中国で生れた“節気”です。日本は南北に長い列島ですので、一口に節気とは言え、地方により、その時期、期間には、相当のズレがあります。それでも、どの地方にも春夏秋冬は確実に巡りますので、そのうつろいは誠に微妙な季節感を表します。この感覚が瑞々しい日本文化の底流にあるように思います。今回は秋をとりあげます。

1. 秋の節気

- (1) 立秋： 8月7日頃。この日から暦の上の秋ですが、わが伊那谷では夏の真っ盛りです。暑さもこの頃から盆頃迄がピークです。伊那谷の秋は盆の頃からというのが実感です。

秋立つや川瀬にまじる風の音 飯田蛇笏

秋は先ず風の音から始まるという感覺的な名句です。

てにをはを省き物言う残暑かな 戸恒東人

- (2) 処暑： 8月23日頃。新涼の候。この頃には猛暑は收まりますが秋暑がぶり返すことがあります。

山を見ていちにち処暑の机かな 西山 誠

暑さから開放されて、書見、書き物もはかどるうれしさです。又河原での焼鮎などは“これぞ田舎暮しの至福”といった風情、味わいがあります。

- (3) 白露： 9月7日頃。虫の音、花芭の候。

朝に夕に伊那谷の爽やかさが際立つ頃です。

ゆく水としばらく行ける白露かな 鈴木鷹夫

仲秋や曇にものの影のびて 片山由美子

- (4) 秋分： 9月23日頃。春分と同じく昼夜の長さが等しい日。月、彼岸、秋の七草、等の候。

賑やかに秋の彼岸の見舞客 石田波郷

身を容るる葉蔭明るき九月かな 鶩谷七菜子

- (5) 寒露： 10月8日頃。収穫、秋祭、虫の声、蜻蛉、旅心の候。

伊那谷では朝晩の冷え込みを肌で感じる頃で、空気も水も澄み渡ります。

とどまればあたりにふゆる蜻蛉かな 中村汀女

水底を水の流るる寒路かな 草間時彦

- (6) 霜降： 10月23日頃。里に初めて霜が降りる候。

菊、紅葉、渡り鳥、秋刀魚等。

秋深き隣は何をする人ぞ 芭蕉

冬の節気は、又の機会に。

編集委員 M



文芸

*は代表者

「さつき俳句会」



初雪を被り遠出の妻かえる	*	北原 興平
マフラーに鼻まで入れて十二月		伊藤よね子
雪音に胸なぜおろす雪囲い		小池平四郎
雪吊りの巧みの業に目をみはる		栗林 仁理
膝ついて臥龍の松の雪囲い		上田 博生
歴史ある老松高し雪囲い		埋橋 玲子
枝も葉も整う松の雪構え		城田 哲夫
そば打ちの名人の居て忘年会		有賀 民子
雪囲い備えはいつも夫任せ		小澤ほづ枝
たらちねの妣の手荒れやお菜洗い		高林 稔

短歌

「個人投稿作品」



雪上がり厳寒の朝は晴れわたり		
西駒の峰は黄金色に映ゆ		
アルプスの空遙かより初明かり		
気力静かに満ち来りけり		
慎ましき方便重ねて恙なく		
世の一隅に初日を拝む		
寿限無		
寿限無		



Topic News

馬鹿はウイルスが原因だったと米大学が発表



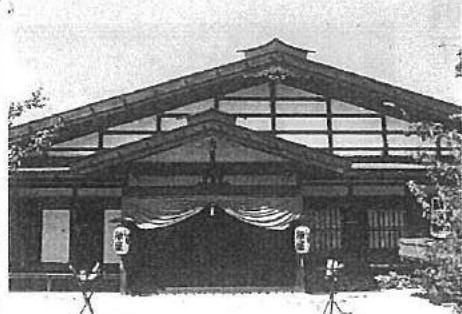
「感染すると知能低下」

そして「情報の処理速度や正確性」や「集中力の持続時間」をテストしたところ、感染グループは非感染者のグループより10%も低いことがわかつたといふ。このように感染すると「知能を低下させる」ということが確かめられたというわけである。

実験用のマウスに感染させても、迷路で迷つてしまふとか、新しい条件を作つても気付かれないとか、はつきりとした違いがあるといふ。

(JCAST テレビウォッチより)

アメリカの学者がバカになる
ウイルスを発見し、感染の有無
で、はつきりと頭の働きに違い
が出たという。これは「おふざ
け」ではなく真面目な話である。
アメリカのニュースサイト
「インターナショナル・ビジネ
ス・タイムズ」によると「人間
を愚かにする脳変換ウイルス」
なるものをジヨンズ・ホプキン
ソン大学のロバート・ヨーケン
教授が発見した。



飯島陣屋への入館
開館時間 9時～17時
休館日 月曜、祝日の翌日
と年末年始
入場料 一般 300円

延宝5年(1677)に伊那谷にある天領(将軍の領地)を代官が管理するため、島陣屋には設置されたもので、執務を行う本陣や代官の住む屋敷、役人の住む官舎や長屋など十数棟の建物で構成されていた。しかし飯島陣屋には殆ど代官は常駐せず、他地区の代官が兼務していたこともあり、出張陣屋となること多かつた。そして明治に入つて天領が接收されると廃止となつた。

その後平成6年に当時と同じ場所に同じ構造様式で本陣が新築復元され、当時の資料や調度品が展示公開されている。

所在地 飯島町飯島(ネット)
番地 2309番地
飯島陣屋より抜粋

飯島陣屋 飯島町

上伊那名所探訪

編集後記

平成27年の1月に発行する会報は、平成26年の末から作成にかかりており、この記事を作成している現在は、まだ26年である。そこでふと思いついたのは「来年のことを言えば鬼が笑う」という諺を思い出した。この意味は、「将来の事はどうなるか、今から決ることはできない」という意味であるとのことであるが、では何故笑うのは鬼なのかということが疑問になり、いくつかの資料を調べてみた。いろいろな話が有ったが、最も面白いと思われるものは次のようなことであった。「閻魔大王は死者を裁く裁判官であり、年内の訪問予定者、つまり死亡者が書き込まれている閻魔帳を持つている。(もともと閻魔帳には全ての人間の運命が記載されているので、地球上の人口が60億人ともなれば膨大な量である。そこで年内の死者の予定分を抜き出してあるようだ)」そして、ここに名前が記されていることを知らないで語っていると、閻魔大王やその手下の鬼どもに失笑されてしまう」ということであるそうだ。どうやら、あまり正確な理由は分かっていないというのが実情らしい。とにかく私達編集委員は、会報作りの取材と編集に励まねばならない。